

小田 実
タコを揚げる
——ある私小説——



小田 実
タコを揚げる
——ある私小説——

筑摩書房

タコを揚げる——ある私小説

一九六六年三月十五日 初版第一刷発行

著者 小田 実

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九一―七六五一
郵便番号一〇―一九一
振替東京六一四二二三

装釘 ヒョンスン
玄順恵

三松堂印刷・積信堂製本
© 小田 実 一九七八年 一〇六―〇二八―四六四

タコを揚げる——ある私小説

Aのことでタコのイメージが眼について離れないのは、やはり、そのとき、彼がタコを実際に手にしていたからではないかと思う。お手製の小さなタコであった。かたちは五角形だったか、六角形だったか、とにかく角形で、色は黄色。

私はそのタコが大空高く舞い上るのを実際に見たわけではない。タコはいかにも素人が作ったという感じのもので、それだけの能力をもつものであったかどうか、私は知らない。ただ、Aのことを考えると、必らず眼に浮かぶのはタコで、その黄色の角形のタコはうすぐろいまでに澄みきって蒼い宙空に黄色の一点となって舞い上っているのである。それほど、彼がそのとき手にしていたタコの印象が強烈だったのだろう。大げさな言い方をすれば、私はそのタコから逃れられないでいて、そこから逃れられない以上、私はAから——Aの存在が意味する、いや、意志するものから逃れられないでいる。

ことにAはひとりでなかったから、そういうせつまつた感じが深いのかも知れない。Aは自分の子供(A')という名前にしておこう。べつにA'がAにぞくしているという意味でそう呼ぶのではない。A'がAのもつ属性を共有しているゆえに、そこにおいてたとえば、その属性を共有していない私とは

別世界、いや、別の次元に存在している人間であるゆえに、そんなふうと呼ぶのである）をそばに連れていて、A'もまたタコをもっていた。

Aは見ばえのよい男ではなかった。北欧系のアメリカ合州国人で、北欧系にすれば背は低く、髪の毛もみごとな金髪だとは言いかねた。名うての民族雑沓の合衆国のことだ、先祖はたしかにアンデルセンの土地からバイキングの船に乗って来たとしても、その民族雑沓のなかをあっちに行きこっちにぶち当りしているうちに、たとえば、イタリア人の血が入った、ユダヤ人の血がまじり合ったというようなことも起っていたにちがいない。もちろん、いくら民族雑沓の国の合衆国のことでも、あそこはまた名うての人種差別国で、Aの血のなかに黒人の血が入り、私のようなアジア人の血が混入したとは信じがたいが、Aに言わせれば、自分はそんなことは超越したというところだろう。たしかに彼はそこまでなみなみならぬ意志を抱いて、そして、タコを抱いて、そのとき、そこにいた。

小柄であった。メガネをかけていた。みごとと言いかねる金髪——いや、赤茶けた髪の毛はちぢれていた。私がAについておぼえていることはただそれだけぐらいのことで、極端なことをありてい言ってしまうえば、彼が、今、突然、私のまえに姿を現わしたとしても、すぐにその彼がAだととめ得る自信はないのだ。もちろん、現われるとしたら彼はタコ——その黄色の角形のタコを抱いて現われるにちがいないくて、そこで、私はただちに彼はAだと気づくにちがいないのだが。——

そんなとき、彼はそのときもそうであったように、私が微笑をむけても、まるではじめて会った他人に対するように、いや、ジャングルのなかで道に迷ったあげく突然ジャングルの住民にでも出会った旅人のように、安堵と期待と不安と親しみが複雑に入りまじった視線で私を見返しただけで、べつに微笑を返しはしないだろう。それから、彼はタコをさし示しながら（そのときもまさしくそうしたので）、みんながこのタコを売って運動の資金をつくり、彼が今よしとする運動を世界中にひろ

げるのだと説明するのにちがいないのだが、その説明のあいだじゅう、まだ、キミはそこにいるのですねという軽侮、——というよりは、あわれみ、それともうひとつは、キミはまだそこにいるか、ワタシはもうそこを離れてしまったのですよ、とり返しつかないことをしてしまったのですよという羨望、それら二つのものにみちた視線でAは私を見ているにちがいない。そのときもそうで、その場の主人役である私を、Aはじっとそんなふうな視線で見つづけていた。

Aの言ったことは、すくなくとも、そこで、人びとに告げようとしたことは簡単だった。すなわち、ベトナム戦争は自分の祖国合衆国が犯したゆるしがたい罪悪だ。それゆえに、抗議のために、自分は合衆国の人間であることを放棄する。

ことはまさしく原理としては簡単なことであった。しかし、実際のことがらとしては、これほど複雑、そして、重大な決意はないにちがいない。Aの、ことのしさいを説明する口ぶりはそれを示すように重く、まわりくどく、明瞭さを欠いていた。そのとき、彼が原理の単純明快さにふさわしく、オレハモウアメリカ人デアルコトハヤメタヨとただ一言はつきりまっ先に言ったとすれば、それはもうそれだけでけっこうな新聞の大見出しで、私の心にそうした思いが実際にそんなふうな大見出しのイメージとともに横切ったことは否めない事実だ。

私がそんな気持になったことをあまり大声でとがめないでいただきたい。それは記者会見の席でのことで、その記者会見と称するものは私が企画したものだだったが、もともとはAの頼みによるのだ。私がここで「記者会見と称するもの」と書くのは、ケンソンめかして言うつもりがあつてのことではない。まず、かんじんの記者がたいして来てくれなかったという事情があつた。しかし、まあ、それはそれでも、ひそかにお目あてにしていた大新聞の記者もカメラマンまで連れて来ていて、サマにはなった。どういうわけで彼がカメラマンまで連れて来る気になったか、まさか蒼ぐろい宇宙空に黄色の

一点となって舞い上るタコのイメージを彼自身が印画紙の上に定着させようという魂胆があつてのことではないと思うのだが、カメラマンを連れて来たのは彼ひとり、やはり、彼はそのことではねがね顔見知りの私に好意を示したかつたのだろう。カメラマンは私にそんな義理を感じることはなかつたから、AとA'と、二人がともに手を出して両端を保持するタコの写真をきわめて事務的にとつた。トリマスヨ。イイデスカ。ハイ、一丁上り。そんなふうにはまさかカメラマンは言わなかつたが、まさにそんなふうに彼はニコンをかまえて何枚かつた。

しかし、問題は、来てくれた記者の数（の少なさ）のことでもなければ、カメラマンの写真のとり方（の事務的さかげん）にあつたわけでもない。何よりもまず、それは記者会見の内容の問題であつた。そして、もうひとつ言えば、その内容を物語る当の人物のことであつた。

ベトナム戦争反対のことなら、もう判っている。会見の席に来ていた記者の大半は、私の見たところ、ベトナム戦争反対論者で、熱心にベトナム反戦を説くAの意見にべつに反論したわけではない。ただもうそれはまったくあたりまえのこと、たぶん、そんなふうにするにきまつてゐることなので、べつにあらためて書くまでもないだろう。なみいる（というのはいささか文学的にすぎる形容で、もっと正確に言えば、「なみいる」から「なみ」をとり去つて「いる」とだけ言つたほうがよいかも知れない。たしかに、記者はいたのである。ありがたいことに来てくれたのである）記者を見わたしてみ、私はただちに、Aへの共感とともにちょっとしたいらだち、それにかんがりの退屈を彼らの表情に読みとつていた。おれだつて、これなら記事にならないと思うだろうな。もちろん、小声であつたが、私はそんなふうになかでつぶやいていたくらいだ。

そのベトナム反戦ということがらがもっとえらい人の口を通して語られていたのなら、記者たちの反応もちがつていたのにちがいない。あるいは、たとえば、ベトナムの戦場帰りの「グリーン・ベレ」

の一員によって語られるなら、たとえ彼がまったく無名の人間であったとしても、それはそれで記者たちの退屈とねむ気を十分に吹き飛ばしたことだろう。あるいは、これは記者たちの名譽に賭けて言っておきたいことなのだが、Aの述べるベトナム反戦の原理というようなものももっと哲學的な啓示にみちたものであったなら、サツまわりで頭のなかのものをすっかりすりへらしてしまつた社会部のくたびれ中年記者でも、もう少し眼を輝かしてAの話に聞き入つたかも知れない。

彼の決意のことはさておいて、その決意に至る彼の反戦の志^{こころざし}については、すべてがあまりに平凡だつた。話の中身もそうなら、Aという人物自身、J・P・サルトル氏でもなければ「グリーン・ペレ」でもない。合州国のなかほどのところにある地方都会に生まれて、そこで育つて、高等学校へ行って、そこを出て、あちこち会社づとめをして、それから、どうしたのか。ワイフと離婚したのだという人があつた。離婚が、どこで、どう、ベトナム反戦と結びつくのか、とにかく、彼はワイフと別れ、子供ひとり、つまり、Aを連れて日本にやつて来た。

なぜ、日本なのか。

そののところもはっきりしない。ベトナム戦争ということとなると、今さらあらためて言うまでもないことだが、日本は最大の荷担者で、そこで、彼のような、ある意味ではなかなか劇的とも言える行為につきでベトナム反戦を訴えるのは意味あることだ。効果的でもある。ただ、彼がもともとそんなふうな氣持をもつて日本にやつて来たのかどうか。彼の話は、そういうかんじなことになることとふしぎに曖昧になつた。日本のことも、ベトナム反戦運動のことはおろか労働運動や学生運動のことまでよく知つていて、なるほど、これなら日本を決意の地にえらんだことも理解できないこともないが、それでいて、日本に自衛隊があるなどということは考えてもいなかったのだ。いや、それはいくら説明しても、彼には、まだ十分に判つていたとは言えない。シカシ、憲法ニハ、日本ハ軍隊ヲ持ツテハ

イケナイト書イテアルと、彼は、私が事実を説明しにかかる、くり返し言った。そのところは日本人である私にも理解不可能なことがらなので、どだい、日本語でも説得の根拠薄弱なことを下手な英語でうまく納得させることなどできるはずもない。そこへもって来て、彼は西洋人によくある、人に逆らうことをもって論理的だとすくなくとも自分のことはみなしている人種で、たださえ話していると疲れる。まして、問題がそういうそもそも非論理的なこととなると、これはもう、彼のような一言居士の勝ちである。話していて、決して愉快な人物ではなかった。私を論理でねじ伏せると、彼は勝ち誇ったように私を見て、その勝利の眼の色は残忍だと思った。

肉体的な欠陥も、そこには影を落していたかも知れない。さっき言い忘れたが、小柄で見ばえのないからだの持主である上に、子供のとき小児マヒをわずらったかどうかで、右足が悪く軽いビッコをひいていた。そんなこと大したことはないと言いついてしまえば、それまでのことである。ただ、彼とつきあってみて判ったのは、彼は、そんなふうにすぐさま言い切れる人間ではないということであつた。

まあ、つまるところ、大した人物ではない。くり返して言うが、彼は、どうあつても、J・P・サルトル氏でもなければ、「グリーン・ベレ」でもない。もちろん、こうした人物も、Aというひとりのアメリカ合州国の中年男の人生を描き出す小説のなかでは光彩を放つこともあるにちがいない。ただ、その記者会見の席は、その目的にふさわしい場所ではなかった。私の顔見知りの大新聞の記者も、他のくたびれ中年男記者諸氏も、そこまでの興味を彼にもたないように見えたとし、私はと言えば、自分で小説を書く男のくせに、Aの西洋人にしてはめずらしく顔色のわるい、つまり、日本のくたびれ中年男なみにさえない表情でいるAの顔の背後に横たわるこまかな人生のヒダに眼をむける気持にどうしてなれないでいた。まず、私自身が疲れきっていたという事情があつた。小説を書くという自分

の仕事も、それからそのころ自分がかかり始めたベトナム戦争反対の運動もたいしてうまくは行っていないかった。そこへもって来て、このAの記者会見のために、あれこれ私は気をつかっていた。いや、正直に言うと、私はもう彼とのつきあいに参ってしまっていたにちがいない。ブツブツ口のなかでつぶやくようにしてしゃべる彼の歯切れのわるい英語は、黙ってきいているだけで、ときには背中が痛くなった。しかし、ほんとうのところは、そうした英語自体のことより、問題は、やはり、彼がそんなふうにしてきわめて要領わるげに語る決意にあったにちがいない。決意の中身が私をくたびれさせたのである。それは、私に無限に疲労を強いた。

一口に言ってしまうえば、アメリカ合州国人ヲ止メルコトである。もちろん、それには前提があつて、ベトナム戦争ニ反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ。

その前提のほうは判った。いや、もうそれは、さっきも言ったことだが、新聞記事にもならないくらいあたりまえのことなのだ。しかし、その前提から導き出されて来た結論の決意のほうはどうなのか。そこには飛躍があつた。

ベトナム戦争に反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ——よろしい。それで、声明に署名する。

新聞広告をする。その企てにお金を出す。

集会をする。

デモ行進をする。

アメリカ合州国大使館前に坐り込みをする。

そこまでぐらいなら判る。したがって、もう、そこまでぐらいのことなら、新聞記事にもならない。よほどのことがなければ、ならない。

合衆国の軍隊から脱走する。

これも判る。しかし、

焼身自殺をする。

これは、どうか。

ことわっておくが、私がAの記者会見の準備をしたときには、日本人の焼身自殺はまだ起っていなかった。由比忠之進さんが首相官邸のままで自分のからだに火をつけたのは、それから二年ほど経ってからのことだった。

焼身自殺はたいへんな行為だと思う。さっき述べた前提からその結論に至るまでには、ためらいと決意のウヨ曲折があまたあったにちがいないくて、それを想像するだけでも、私はくたびれる。まして、決意を実行するということとなると、私の想像を絶する。ただ、そうは言っても、前提から結論までウヨ曲折はあっても、二つのあいだのつながりはまだ理解できるような気がする。それは、Aの場合の前提と結論のつながりに比べてみると、はつきりする。すくなくとも、Aの場合に比べて、論理的に明快なのである。すっきりとしている。なぜ、そうなのか。焼身自殺の場合、自殺者は、その行為において死に、そこで、彼の前提から結論に至る論理、そして、倫理は完結する。

死刑囚は、あれは刑務所にいるのではなく拘置所にいるのだという話をきいたことがある。刑務所というのは刑の執行を行なうところで、囚人はそこで彼に科せられた刑の執行を受けているのである。刑の執行を受けるまえの人間をかりにとじこめているところが、すなわち、拘置所で、死刑囚は、考えてみると、まだ、刑の執行を受けていないのだ。そこで拘置所にいるというわけなのだが、焼身自殺という行為で私が想起するのは、ひとつは、こういう死刑囚のことのありようなのである。焼身自殺者は、自分の死というこの世の中の誰にとっても最後の「行為」において、自らの論理、倫理の体

系を閉じる。そこで、いわば、取りこぼしがない。

それに対して、ベトナム戦争ニ反対シ、抗議ノ意志ヲ表示スルタメ、アメリカ合州国人デアルコトヲ止メル人間は、どうなのか。やめたあと、彼はまだ生きる。生きつづけている。これが、ヤヤこしい。

もっとも、そのとき、私にそれらすべてのことのありようがはっきり見えていたわけではない。

2

記者会見に、Aはタコをもち、A'、つまり、子供を連れて出た。A'もAのにくらべて小型のタコをもっていたから、合計二つのタコがその場に立ちあらわれていたことになる。

「子連れ何とかやらすな」と、顔見知りの例の大新聞の記者が言った。「子連れ狼」というようなことばがはやり出すまえのことで彼はそんなふうに言ったのだが、そのころ、そういうことばがはやっていたら、彼はすぐさま使ったにちがいない。彼はむやみやたらと流行語を使う男で、それがジャーナリストたるものの本分と心得ているようにも見えてときどきウンザリしたが、彼の人のよさを私は愛していた。「子連れ何とかやら」に私も応じなくてはならない。それで、「子連れ平和行脚」というところかな」と私は言った。

「それにしても、タコと国籍離脱はどうにも結びつかない感じがすな。」

記者会見がなんとかカッウをつけて終り、AがA'を連れ、タコをもって立ち去ったあと、二人を見送るようにして見ていた記者が急にふり返って言った。とっさのことで私が黙っていると、記者は、「ま、どっちも突拍子もない感じで」と、自分で自分にうなずくようにつぶやいた。

いつもなら、おしゃべりな彼のことである。それにぎつくばらんであることがこれもまたジャーナ

リストの資格であると確信しているにちがいない、私が記者会見に連れ出した人物やら、そこで発表したニュースやらについて、無遠慮にあれこれ言い出すのだが、「あれ、ちょっとタマがわるいですな」「少し長すぎましたよ。このニュースであれだけしゃべったら、ダレて来る。かえってよくないですよ」、その日はそれだけしか言わなかった。本来なら、Aのような人物は、彼の無遠慮な品さだめのいい対象であるはずなのだ。そこへもって来て、Aは「子連れ何とか」で、おまけに、親子をろってタコをもつて来ている。

タコを売って歩くという考え自体が、いかにもバカげたものであった。ほんとうを言うと、私は、ベトナム戦争ニ反対シ、抗議ノ意志ヲ表明スルタメ、アメリカ合州国人デアルコトヲ止メルということのほうは知っていたが、タコ云々はAが記者会見の最中に、彼のその決意のわかちがたい一部分であるかのように言い出すまで知らなかったのである。たぶん、彼は、まえて私にそのことを告げれば、私はとめるにちがいないと考えたのだろう。それは実際その通りなのだが、Aにはそういうことを見ぬく才覚はふしぎにあった。あとできくと、私といっしょに記者会見の準備をし、新聞社や通信社に前日の午後いっばいを使って誘いの電話をかけた私の運動の若い仲間たちは知っていた。「なんや、知りはらへんかったんですか。」そのうちのひとりが、どういうわけからか、関西弁を使って言った。「ボクラ、タコの話、なかなか面白いと思うてましたんやけどな。」

面白いかどうか。いや、たしかに面白い話であった。それにはまちがいが無い。タコをつくって売りがながら、彼の志を世界のみんなが共有し、平和が世界に訪れる。そして、これもまた大事なことだが、彼のくらしもそこで成り立つ。

ただ、どのようにして、売り歩くのか。いや、そもそも、タコは、どこで、誰が、どのようにするのか。いったい、タコを買う人間がどれだけいるのか。

Aがタコの話をし始めたとき、あ、これはまずいな、と私はとっさに思った。そして、まるで自然な連想のようにして、ひとつの顔が浮かんだ。

と言って、美しい女人の顔が浮かんだというのではない。メガネをかけたくたびれた中年男の顔で、それこそ、これもまた、どこにでもある、どこにでもお目にかかる顔だ。ただ、その顔は思いつめていた。眼に異様な光があった。

中年男はバスの運転手で、べつに政治的な運動に加わっていたのではない。若いときも、彼の言い方を借りれば、「その気はまっただくなかった。」その彼——Bが、河のなかに子供を抱きながら入っているベトナムの農婦の写真を見て、私たちが何度も行なったデモ行進にやって来るようになった。いや、そのうち、自分で自分にできることをやろうという決意をかためた。

バスを一台買おうというのである。幸いにも、自分はバスの運転ができる。それで、バス会社をやめて、ベトナム反戦を人びとに訴える「反戦バス」を日本中に運転してまわりたい。会社をやめれば、退職金が入る。それで、バスは中古品なら買える。

はじめて、その話をきいたときには、私はあわてた。そんな無謀なことをと私は言ったが、Bはそくさに、ベトナムの人びとはそれほどひどい目にあっているのですとことばを返した。彼のまえで、政治的な効果を云々したところで、それは無駄にきまっていた。私がそう言ったところで、彼は、これは、まず、自分の内面の問題だと、そんなふうにくまなく学生たちのように言ったかどうかは知らないが、結論としてはそういうようなことになる決意を述べたにちがいない。妻子のことを言い出したところで、それもまた自分の問題だと言って返して来るだろう。中年男はなかなか決意しないものだが、いったん決めるとなると、どんなことだって決めてしまうのではないか。私の友人の神経科の医者が、若いときの自殺は、いかにも自殺したがるやつがするものだが、中年になるとちがうね、自殺

するから自殺するという感じだな、あれは、とめようがないと言ったことがあった。

Bが実際に会社をやめ、バスを買い、全国行脚に出かけたという話を聞いたのは、それから二月も経たないころだった、そのあと、バスがどこをどう走り、どのように彼が考える運動が進展して行っただか、私たちは追跡する手立てを失なってしまっていた。ときおり、彼のことは話題に出て、出るたびに私の心は痛んだが、どうしようもない。そして、時間というものはおそろしいものだ、一年が経ち二年が経ちするうちに彼のことは私の心からさえ消えていた。

彼がそこに立ちかえって来たのは——いや、彼はケチくさい私の心などにかぼそく立ちかえって来たのではない。もっと荒々しく音をたてて、私の現実の視界のなかに躍り入って来たのである。

私は東京から大阪まで行く用事があって新幹線に乗っていた。東京を出て半時間ほど経ったころ突然、列車の通路の扉が開いて、それとともに、みなさん、笑いは人間健康の素、家庭の平和も笑えば来る、日本の平和も笑えば来る、ベトナムの平和も笑えば来る、世界の平和も笑えば来ると、大声で叫びながら、「日本・ベトナム・世界平和ニコニコ運動」というタスキをかけた上半身はだかの男がからだ全体ではずみをつけるようにして入って来た。文字通り、それは躍り入って来るような感じだったが、ことさらに私がそう感じたのは、やはり、その男がB——かつてのバスの運転手であったからにちがいない。彼はまっすぐに私の視界のなかに入って来た。私のからだの内部の中心のところまで、彼の跳躍は伸びて来た。

私はとっさに眼を伏せていた。と言っても、Bのその姿が正視できなかったというのではない。たぶん、私のほうが正視できない存在としてあるように感じたのである。彼はそれだけのことばをくり返して述べ、模範を示すように実際に笑った。

ひきつったような笑いではなかった。もっと自然な笑いで、決して、無理して笑っているのではな